

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：22701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02970

研究課題名(和文) 大学生・社会人向け英語基礎力自己診断ツールの開発及びその形式的利用法の構築

研究課題名(英文) Development of Self-Analysis Tool of Basic English Skills for College Students and Working Adults and Construction of its Formative Use

研究代表者

加藤 千博 (Kato, Chihiro)

横浜市立大学・国際教養学部(教養学系)・准教授

研究者番号：20638233

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、大学生及び社会人を対象とした英語基礎力自己診断ツールを開発し、外部試験を取り入れた授業におけるそのツールの形式的利用法を考案し、そのカリキュラムを構築することである。第一段階として「RLGテスト(英語基礎学力テスト)」を改良し、語彙と文法の基礎学力を自己診断できるWebツールを開発した。第二段階としてRLGテスト受験者の語彙と文法の習得傾向を分析し、Reading語彙とListening語彙とのギャップ(習得数の差)における習熟度別の傾向を明らかにした。第三段階としてReading語彙とListening語彙を獲得するためのWeb学習ツールの開発を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

語彙と文法の基礎学力を自己診断できるWebツールは、学習者がこれまでの学習を振り返り今後の学習方法を検討する上で役立つものである。語彙テストはJACET8000に基づいており、文法テストは主要文法項目別に分類されているため、受験者データを分析することにより、日本人学習者特有の習得傾向を把握することに役立てられる。本研究においても、Reading語彙とListening語彙とのギャップが、習熟度によって異なることが明らかになった。また本研究で提供したWeb語彙学習ツールは英語学習から遠ざかっている社会人だけでなく、初学者である小学生にも有用であることが利用者の反応から明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to develop a self-diagnosis tool for basic English ability intended for university students and working adults, and to devise a formative usage of the tool in the lesson incorporating external exams and construct the curriculum. At the first step, we improved the RLG test: basic English ability test, and developed a Web tool that helps learners self-diagnose their basic skills of vocabulary and grammar with the test. At the second step, we analyzed the vocabulary and grammar acquisition of RLG test takers, and clarified the tendency of the gap between reading and listening vocabularies-difference in the number of vocabulary acquired- according to proficiency levels. At the third step, we developed a Web tool to learn reading and listening vocabulary.

研究分野：英語教育

キーワード：英語教育 教育効果・測定 文法 語彙

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

大学の教育現場では TOEFL や TOEIC 等の外部試験が英語力測定に広く使用され、入試はもとよりクラス分けや到達度の判定基準に使用されるケースが年々増えていた。横浜市の市立高校では 2 年生全員の TOEFL-ITP 受験がカリキュラムに盛り込まれたように、高校にも外部試験の波は急速に押し寄せていた。この現象は一般企業においても顕著に見られ、TOEIC が就職活動を目的とする大学生にとっては必須のテストとなっているだけでなく、就職後の社内英語力測定にも積極的に活用されていた。当然のことながら受験者はより良いスコアを獲得しようとテスト対策を講じようとするが、実際にはどのような学習をすれば良いのかわからないことが多く、問題集に依存した偏った学習に陥ってしまいがちであった。TOEFL や TOEIC 等の外部試験は英語力を客観的に計測する上で非常に有用な手段であるが、学習者個人に対して個別の学習方法を提示するものではない。得られたスコアからは次に何に取り組むべきかの明確な指針が見えてこない。また近年のコミュニケーション重視の英語教育方針によって、文法学習が疎かになったり、文法指導に躊躇したりする教員が増える一方で、外部試験対策に追われる教員は旧来型の受動的な授業方法から脱しきれない状況があった。そこには、そもそも「コミュニケーション力を支えるものが文法である(文科省, 2008)」という認識が欠けており、相互補完的であるはずのコミュニケーション活動と文法学習を二項対立的にとらえてしまう傾向が教育現場で多く見られた。

そこで我々の研究グループでは、大場昌也氏が開発した「RLG テスト(大学標準英語学力テスト)」を利用して、習得語彙レベルと英語基礎文法力の研究を継続的に行い、外部試験を利用したカリキュラムにおけるこのテストの形成的利用方法の開発に努めてきた。この「RLG テスト」は、「R(読んでわかる単語)テスト」、「L(聞いてわかる単語)テスト」、「G(文法の基礎知識)テスト」からなっている。これまでにこのテストの信頼性と妥当性を検証したうえで、TOEFL や TOEIC との相関関係を調べ、このテストが外部試験のプレテストとして機能することを検証した。また自己評価票の分析から多くの学習者が「受験詰込み型」の学習方法から脱し切れておらず、コミュニケーションアプローチからの学習を取り入れる準備が整っていないことが明らかとなった。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、大学生及び社会人を対象とした英語基礎力自己診断ツールを開発し、外部試験を取り入れた授業におけるそのツールの形成的利用方法を考案し、そのカリキュラムを構築することであった。具体的には、(1)「RLG テスト(大学標準英語学力テスト)」を改良し、自己評価票とポートフォリオを一体化させた、英語基礎力を自己診断できる Web システムを開発する。この自己省察システムを利用して(2)大学生・社会人に対して、語彙、文法、コミュニケーション力向上のために、習熟度に応じた効果的な学習方法を考案し、自律的学習方法を修得できるようにする。(3)教育者に対しては、従来型の受動的な授業方法から能動的なアクティブ・ラーニング型の授業方法への転換を可能にし、形成的アセスメントを促進する評価方法を提案する。

### 3. 研究の方法

本研究では、大学生・社会人を対象とした「英語基礎力自己診断ツール」を開発し、外部試験を利用する教育者及び学習者に対してこのツールの形成的利用方法を考案、提供することを目指した。初年度は、JACET8000 語彙リストの改訂に伴う現行の「RLG テスト(英語基礎学力テスト)」の改訂及び新バージョンの開発を行いながら、アンケート機能を加えて「Web 版 RLG テスト」を更新した。2 年目は、テストデータを分析し、語彙力、文法力と TOEFL・TOEIC との関連を調査するとともに、日本人学習者の語彙習得傾向を明らかにし、同時に学士力・社会人基礎力としての英語力の基準を考察した。3 年目と 4 年目は、自己学習に適した語彙学習ツールを開発、提供し、利用者からのフィードバックを分析した。同時に「英語基礎力自己診断 Web ツール」を利用し形成的アセスメントを可能とする評価方法とカリキュラムを策定を試みた。

### 4. 研究成果

第一段階として「RLG テスト(大学標準英語学力テスト)」を改良し、語彙と文法の基礎学力を診断できる Web ツールを開発した。第二段階として RLG テスト受験者の語彙と文法の習得傾向を分析し、Reading 語彙と Listening 語彙とのギャップ(習得数の差)における習熟度別の傾向を明らかにした。第三段階として Reading 語彙と Listening 語彙を獲得するための Web 学習ツールを開発し、ホームページ上で公開した。

語彙と文法の基礎学力を自己診断できる Web ツールは、学習者がこれまでの学習を振り返ると同時に今後の学習方法を検討するうえで役立つものである。語彙テストは JACET8000 に基づいており、文法テストは主要文法項目別に分類されているため、受験者データを分析することにより、日本人学習者特有の習得傾向を把握することに役立てられる。本研究においても、Reading 語彙と Listening 語彙のギャップが、習熟度によって異なることが明らかになった。また本研究で提供した Web 語彙学習ツールは英語学習から遠ざかっている社会人だけでなく、初学者である小学生にも有用であることが利用者の反応か

ら明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 工藤泰三	4. 巻 29 (2)
2. 論文標題 地球的課題を扱うCLIL授業実践における高次思考を促す試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 名古屋学院大学論集 言語・文化篇	6. 最初と最後の頁 39-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yukiko Tashima	4. 巻 5
2. 論文標題 What problems does a writing teacher find in freshmen's English writing? : Six features found in freshmen's writing	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Journal of Tokiwanomori	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤千博、田島祐規子、村上嘉代子、前川浩子	4. 巻 69
2. 論文標題 文法の基礎知識を測るGテストの形成的利用 - コミュニケーション活動と文法指導の両立を目指して -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 横浜市立大学論叢	6. 最初と最後の頁 57-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤千博、小出文則、前屋敷祐一、高嶋紀子	4. 巻 4-1
2. 論文標題 J-POSTLを活用した現職中学教員研修：「学び続ける英語教師の確立」を目指して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 言語教師教育	6. 最初と最後の頁 104 ~ 118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Masao Kanaoka, Ema Ushioda, Atsuko Watanaba, Chihiro Kato	4. 巻 5
2. 論文標題 Person-in-Context Theory and Spirituality in the Japanese College EFL Contexts: Implications from Theory, Survey, and EFL Practice	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 JACET International Convention Selected Papers	6. 最初と最後の頁 178-197
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Kayoko H. Murakami, Taizo Kudo, Yukiko Tashima
2. 発表標題 Development of a Reading Vocabulary Test: Sophistication of RLG Test
3. 学会等名 The JACET 57th International Convention (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KANAOKA Masao, USHIODA Ema, WATANABE Atsuko, KATO Chiro
2. 発表標題 Integration of Person In Context Theory (PICT) and Spirituality: Aimed at Establishing Tangible Self-awareness of L2 Motivation toward Self-and-Language Maturity
3. 学会等名 JACET International Convention (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高木亜希子、醍醐路子、浅岡千利世、加藤千博
2. 発表標題 言語教師の成長ツールであるJ-POSTLとは何か
3. 学会等名 言語教育EXPO 2017
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 佐藤響子、Carl McGary、加藤千博	4. 発行年 2019年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 218
3. 書名 大学英語教育の質的転換-「学ぶ」場から「使う」場へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

RLG研究会（英語教育） <a href="http://rlgtest-english.com/">http://rlgtest-english.com/</a>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田島 祐規子  (Tashima Yukiko)  (70377117)	横浜国立大学・国際戦略推進機構・教授   (12701)	
研究分担者	村上 嘉代子（平野嘉代子）  (Murakami Kayoko)  (90424895)	芝浦工業大学・工学部・教授   (32619)	
研究分担者	前川 浩子  (Maekawa Hiroko)  (10434474)	金沢学院大学・文学部・准教授   (33305)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	工藤 泰三  (Kudo Taizo)  (60734209)	名古屋学院大学・国際文化学部・講師    (33912)	
研究 協力者	大場 昌也  (Oba Masaya)		
連携 研究者	マクガリー カール  (McGary Carl)  (60377116)	横浜市立大学・国際総合科学部・教授    (22701)	
連携 研究者	高橋 邦年  (Takahashi Kunitoshi)  (00154815)	横浜国立大学・国際戦略推進機構・教授    (12701)	
連携 研究者	板谷 雄二  (Itaya Yuji)  (40176277)	朝日大学・経営学部・教授    (33703)	